

『高野物語』の歴史認識と作者説

——北条泰時と醍醐天皇を中心に——

大 坪 亮 介

はじめに

— 『高野物語』における承久の乱

中世、高野山や空海をめぐる伝承を集成した文献が数多く生み出された。十三世紀後半の成立と考えられている『高野物語』⁽¹⁾もその一つである。伝本は三宝院本と親王院本の二種があり、両本の間には若干の本文異同が見られるものの、同類本であるとおぼしい。⁽²⁾『平家物語』とも影響関係があるとされ、かねてより先学の注目を集めてきた。⁽³⁾本稿ではそれらの驥尾に付しつつ、従来注目されつつもあまり正面から論じられてこなかった、該書における承久の乱をめぐる歴史認識の様相を分析し、これと作者説との関わりについて、若干の考察を試みたい。

まずは、全五巻から成る『高野物語』の概要を示す。巻一と巻二では、念仏・天台・禪の僧が自宗の優位性を主張していく。しかし、最後に登場した真言の老僧がそれらの説を論破し、真言の教えこそが他宗に勝ることを示す。以降は真言の老僧と少童の対話のみとなり、巻三前半では三力を兼ね備えた真言の教義が説かれ、後半では真言の教えが神明に裏付けられたものであることが明かされる。そして巻四と巻五では、空海の伝記とそれに関連した言説が語られる。

『高野物語』は、およそ右のような内容を、いわゆる鏡物の形式で述べていく。すなわち巻一のはじめの箇所で

は、「貞観ノ聖苗」つまり清和源氏の流れを汲む「予」が、後鳥羽上皇による「征夷」計画の失敗を見越して遁世、承久の乱翌年の「九月ノ中四五日」に法輪寺を詣でた際、傍らの僧たちが語ったことを「久成侍ナバアヤナク忘ヌベシト覚ヘ」、その内容を書きとめたとされている。

この冒頭部分の記述でまず注目したいのは、「予」が承久の乱に参加せず遁世するに至った経緯である。

遠ハ大友ノ皇子・惠美ノ大臣、近ハ承平ノ将門・康和ノ義親コレナラズ、目前世ノ平太相国ニ至マデ、劍閣ノサカシキヲ憑テ、朝憲ヲソムク輩ハ多ケレドモ、王事モロヒ事ナケレバ、征罰ニ伏セズト云事ナシ。(中略)勅命ヲ蒙ラム時身ヲ願テ宣旨ヲ奉^ラ返シ、違勅ノ責可難^レ遁テ、皇化ニ随ハ^ハ、運命ヲ保事難カルベシ。何者、百皇ヲ百年ニタクラブレバ、已ニ八十ノ運ニ過タリ。暮齡壯年ニカヘル事難カルベシ。況長久ニ神鏡炎ノ中ニワキテ文道ノ守スデニ尽ヌ。寿永ニ宝剣浪ノ底ニ沈テ武備ノカタメ亦カケヌ。若神ノ資アルベクハ、神劍世ニカヘラザランヤ。神ノ助難クバ、何ヲ以カ朝敵ヲ征セム。

これまで朝敵は悉く滅ぼされてきた。しかし、後鳥羽は

「百皇」のうち既に八十代を過ぎた天皇である。しかも神鏡・宝剣を欠いているため、朝敵退治に必要な神の助力は得られないという。ここでは天皇が百代で滅びるといふ、いわゆる百王思想に基づき後鳥羽の敗北が説明されている。しかも右の引用の前には、日本における仏法の伝来と発展が、天皇の代数と人間の年齢の類比により説明されている。「予」が遁世する理由を述べた右の引用は、こうした歴史認識とも関連していると考えられる。

このように、『高野物語』では、三種の神器の有無と百王思想という観点から承久の乱が捉えられており、それが物語の舞台設定に大きく関わっている。では、こうした歴史認識は、承久の乱について述べる他の歴史叙述にも見られるものであろうか。

まずは『六代勝事記』⁴を挙げる。後鳥羽は次のような人物として描かれている。

芸能ニをまなぶなかに、文章に疎にして、弓馬に長じ給へり。国の老父、ひそかに文を左にし武を右にするに、帝徳のかけたるをうれふる事は、彼呉王劍客をこのみしかば、天下に疵をかふるものおほく、楚王細腰をこのみしかば、宮中にうゑてしぬる者おほかりき。

そのきざとうゑとは世のいとふ所なれども、上のこのむに下のしたがつゆゑに、国のあやふからん事をかなしむなり。

傍線部のように、後鳥羽は「帝徳」に欠け、下々もそれに倣つたため、国が危機に瀕したとされる。そして、末尾に置かれた問答では、後鳥羽が敗北し流罪の憂き目にあつた理由が説明されている。

抑時の人うたがひていはく、「我国はもとより神国也。人王の位をつぐ、すでに天照太神の皇孫也。何によりてか三帝一時に遠流のはぢある。……」

「時の人」は、天照大神の末裔である天皇がなぜ遠流となつたのかと問う。これに対して、「心有人」はその理由を次のように述べる。

心有人答ていはく、「臣の不忠はまことに国のはぢなれ共、宝祚長短はかならず政の善悪によれり。(中略) 悪王国にある時は、へつらへるを寵してかしこきをしりぞけ、然によりて、行ふ所は例にあらざれば、ふく風は枝をならし、降雨はつちくれをやぶり、内には胡旋女国をかたぶけ、外には朝錯いきほひをきはめて、海内の財力つきぬれば、天下泰平ならず。……」

「悪王」が国にある時は天下は泰平ではないという。具体的には、後鳥羽がひたすら帝徳に欠けた「悪王」であつたからだといふことにならう。先学が既に明らかにしている通り、『六代勝事記』では、承久の乱の原因が、後鳥羽の失政に帰せられているわけである⁵。しかも、『六代勝事記』は、『高野物語』とは違い、三種の神器について言及しない。

次に慈光寺本『承久記』⁶上巻を見てみよう。

義時ガ仕出タル事モ無テ、日本国ヲ心ノ儘ニ執行シテ、動スレバ勅定ヲ違背スルコソ奇怪ナレト、思食ル、叡慮積リニケリ。凡、御心操コソ世間ニ傾ブキ申ケレ。(中略) 御腹悪テ、少モ御気色ニ違者ヲバ、親子ヲ召集、結番、寵愛ノ族ヲバ、十二殿ノ上、錦ノ茵ニ召上セテ、踏汚サセラレケルコソ、王法・王威モ傾キマシマス覽ト覚テ浅猿ケレ。月卿雲客相伝ノ所領ヲバ優ゼラレテ、神田・講田十所ヲ五所ニ倒シ合テ、白拍子ニコソ下シタベ。古老神官・寺僧等、神田・講田倒サレテ、歎ク思ヤ積ケン、十善君忽ニ兵乱ヲ起給ヒ、終ニ流罪セラレ玉ヒケルコソ浅増ケレ。

ここでも『六代勝事記』と同様、後鳥羽の振る舞いが批判されている。なかでも、白拍子らを宮廷に招き入れ寵愛したことが、「王法・王威」の危機と認識されており、さらに、土地を没収された寺社の嘆きが積み重なったことが、兵乱のきっかけになったかとされている。『承久記』もまた、三種の神器の喪失と後鳥羽の敗北を関連付ける記述にはなっていない。

このように、『六代勝事記』・『承久記』では、承久の乱の原因を後鳥羽の帝王としての資質の問題に帰している。こうした認識は、後代の歴史叙述にも引き継がれており、例えば、北畠親房の『神皇正統記』²¹では、後鳥羽の挙兵が次のように論評されている。

王者ノ軍ト云ハ、トガアルヲ討ジテ、キズナキヲバハロボサズ。頼朝高官ニノボリ、守護ノ職ヲ給、コレミナ法皇ノ勅裁也。ワタクシニヌスメリトハサダメガタシ。後室ソノ跡ヲハカラヒ、義時久ク彼ガ権ヲトリテ、人望ニソムカザリシカバ、下ニハイマダキズ有トイフベカラズ。一往ノイハレバカリニテ追討セラレンハ、上ノ御トガトヤ申ベキ。

親房は、義時までの武家政権に落ち度はなかったとし、後

鳥羽が「一往ノイハレバカリニテ」義時追討を企てたことを、「上ノ御トガ」と断じている。

これらに対して『高野物語』では、後鳥羽が百王のうち八十代を過ぎていくこと、そして既に神鏡・宝剣が失われていることという、後鳥羽自身の言動とは無関係な要素が強調されており、後鳥羽をことさら悪王とはしていない。

次に、百王思想との関わりを検討していこう。そもそも「百王」とは、『神皇正統記』に、

又百王マシマスベシト申メル。十々ノ百ニハ非ルベシ。窮ナキヲ百トモ云リ。百官百姓ナド云ニテシルベキ也。

とある通り、本来は多くの王という意味であった。しかし、それが次第に天皇家は百代までしか続かないという、いわば終末論的な意味で理解されるようになった。²² 承久の乱直前か直後に書かれた『愚管抄』²³ 卷三には、そうした意識がはっきり読み取れる。

……神ノ御代ハシラズ、人代トナリテ神武天皇ノ御後、百王トキコユル、スデニノコリスクナク、八十四代ニモ成ニケルナカニ、……

神武に始まり、現在の順徳に至るまで八十四代、百王まで

あとわずかであるという危惧が示されている。一方で『愚管抄』巻七にはこのような記述も見える。

コノ日本国ハ初ヨリ王胤ハホカヘウツルコトナシ。臣下ノ家又サダメヲカレス。ソノマ、ニテイカナル事イデクレドモケフマデタガハズ。百王ノイマ十六代ノコリタルホドハ、コノヤウハフツトタガウマジキ也。

ここでは、日本国では天皇とこれを支える臣下との関係が百代までは安寧であるとの見通しが提示されている。慈光寺本『承久記』も同様である。

我朝日域ニモ、天神七代、地神五代ゾ御座マス。(中略)合テ十二代ハ神ノ御世也。其ヨリ以来、人王百代マシマスベキト承ル。人王ノ始ヲバ、神武天皇トゾ申ケル。葺不合尊ノ四郎ノ王子ニテゾマシマシケル。其ヨリシテ去ヌル承久三年マデハ、八十五代ノ御門ト承ル。

この箇所では人王すなわち天皇が百代続くであろうことが示されている。しかし、『承久記』において、これ以降百王に関わる言説は見えない。前述の通り、後鳥羽はその悪しき振る舞いによって幕府との戦いに敗れたと非難されるのである。一方、『高野物語』は、後鳥羽に神の助力がな

かったゆえ敗北したとする点では『六代勝事記』・『承久記』と共通しているものの、後鳥羽をことさら悪王として退ける姿勢が希薄であるという特徴を指摘できよう。

『高野物語』の後鳥羽批判の焦点は、巻五の次の記述から窺える。神泉苑の荒廃と修造について述べた箇所である。

(空海が神泉苑に龍王を勧請したことを語る) 大師ノ門徒タラン人殊ニ存ズベキ事ニコソ。シカルニ世末ニ成テ、神泉ハ苑モ無下ニアレテコソ待メレ。承久ノ前ノ比ハ、君モ御信力ノ薄クナラセ給ヒケルニヤ、国ノ廢ルベキ前相ニヤ、殊ニ此所ライルカセニセラレテ、猪鹿ヲ放チヲキテ御狩ノ由ニ、北山ヨリセコヲヲテ、門ヲ開テカリコメテ、誠ニ殺害スルマデハ無レドモ、是ライラレナンドシ侍ケルトカヤ。

傍線部では、「承久ノ前ノ比」は「君」の不信心ゆえ、あるいは亡国の前兆ゆえ神泉苑が荒廃したとされている。ここからは、後鳥羽は神泉苑を蔑ろにしていたと読める。しかし、例えば『高野物語』の影響下にある『高野大師行状図画』^⑩では、神泉苑は「後鳥羽の法皇おりゐさせ給て後、建保の比より、此所むげにすたれぬ」^⑪とある。さらに、

『高野大師行状図画』を引く梵舜本『太平記』卷十二「神泉苑事」の記述も「後鳥羽法皇ヲリ居サセ給ヒテ後、建保ノ比ヨリ此所廢レ」と全く同様であり、神泉苑は後鳥羽以後に衰亡したとの理解が示されている。実際に、後鳥羽は神泉苑を幾度も訪れ、その整備にも熱心であった。¹²しかし、『高野物語』は、神泉苑の衰亡と承久の乱を結びつけ、後鳥羽を暗に批判していると捉えられる。後鳥羽をとりたてて悪王とはしないものの、小野流にとつて重要な地である神泉苑を蔑ろにしたということに、『高野物語』は重点を置いていると思われる。

二 北条泰時の神泉苑修造

前章でみたように、『高野物語』は、承久の乱について他の同時代の歴史叙述とは異なる認識を示していた。さらにこれと関連して、乱後京都で戦後処理に当たった北条泰時についても興味深い記述が見られる。巻五、前章の終わりに掲げた記事に続く箇所である。

サテ承久二天下ノ大事出来テ、世中静マリテ後、左京權大夫ノ嫡子武藏前司泰時、天下ノ事六波羅ニテ執行ヒ給シ折節シ、此事（筆者注、神泉苑が荒廢していた

こと）ヲ人語りケルニヤ、四面ニ築垣門ナド修理セラレテ後ゾ、人ノ乱入スル事モ留テ侍メル。誠ニ目出度キ御沙汰ナルベシ。世ノ末ニモ心アラン人ハ公私ニ付テ此所ヲ崇メラルベシトゾ覺エ侍ル。総テ此武藏前司ノ天下ヲ行ハレシ間、何事ニ付テモ徳政一ニアラス。中ニモ小野曼茶羅寺トテ、前ニ申侍ツル雨僧正（上編）ノ本寺ニテ小野ノ流ト申真言弘テヤン事ナキ寺モ、承久大乱ノ時、物取ニ焼レテ跡ナク成テ侍シヲ、此武藏前司聞給テ恐ヲナシ給テ、程ナク作テ供養ヲ遂ゲラレニケリ。有難キ事ニ侍キ。

承久の乱後、六波羅に駐留していた北条泰時が神泉苑を修造し、小野曼茶羅寺を復興したことが語られている。東島誠氏が指摘するように、実際に泰時が神泉苑を修造したのは、『吾妻鏡』によれば承久の乱から約十年も経過した寛喜三年（一二三二）のことであった。¹³東島氏は、『太平記』の神泉苑説話を分析対象とした論考の中で、『太平記』の作者において、この修理が承久の乱以後鳥羽との関連において認識されている点は見逃せない」と述べている。『太平記』がこのような認識を示す点は首肯されるものの、『太平記』の神泉苑説話は『高野大師行状図画』に依拠し

ており、さらに『高野大師行状図画』は『高野物語』に基づく。従って、承久の乱と神泉苑修造とを結びつける理解は、『太平記』独自のものではなく、少なくとも『高野物語』にまで遡りうるものと考えられる。

曼荼羅寺再建に関しては、『高野物語』以外の文献にも同様の記述が見いだせる。まず、『野沢血脈集』¹⁶ 卷一を挙げよう。

小野曼荼羅寺ノ事 醍醐往新鈔云、夫曼荼羅寺者、長元年中之建立。仁海僧正之旧跡也。(中略) 其寺并曼荼羅承久兵乱時、為軍兵被燒失。其後関東為悔造之云々。

長元年中に建立された曼荼羅寺は、承久の乱の際、軍兵により焼失、その後これを悔いた鎌倉幕府により再建されたという。ただし、ここでは再建を主導した人物を名指ししていない。

さらに、『吾妻鏡』承久三年十月十三日条にも寺院造立の記事が見える。

癸亥。(中略) 武州於京都、此程草創伽藍。是且為三関東若公并二品禪尼息災、且為今度合戦間滅亡貴賤得脱也。

「武州」こと泰時が京都で伽藍を草創した。その理由は、「関東若公」頼家と「二品禪尼」北条政子の息災および戦没者の得脱であったという。この十日後の十月二十三日条には、

廿三日癸酉。武州建立堂舎。今日有供養儀。曼陀羅供也。

とあり、堂舎で曼荼羅供が行われたとある。『吾妻鏡』ではこれが曼荼羅寺であるかどうか明記されていない。しかし、仁和寺の記録『承久三四年日次記』には、次のように記されている。

十月廿三日、癸酉、武蔵守泰時、供養醍醐曼陀羅寺。
〔去七月為物取、令消失之間造營之〕、導師僧正仁和寺院道尊。

泰時が醍醐曼荼羅寺の供養を行ったことがはっきりと記されている。しかし、『承久三四年日次記』では、曼荼羅寺焼失の理由が、「去七月為物取」とされている。幕府軍が官軍を破って京都に侵攻したのは、承久三年六月のことであったので、『承久三四年日次記』の記述によるならば、曼荼羅寺が焼失したのは厳密には幕府の軍兵によるのではなく、高野山に逃れた曼荼羅寺焼失を物取の仕業とする点では、『高

『高野物語』はこの『承久三四年日次記』の記述に最も近く、『高野物語』は、承久の乱当時の正確な情報^{〔17〕}が記されているといえよう。なおかつ、曼荼羅寺について「^{仁德}雨僧正ノ本寺ニテ小野ノ流ト申真言弘テヤン事ナキ寺」との記述をわざわざ付加している点よりすれば、該書では、小野流とその祖仁海にとって重要な神泉苑と曼荼羅寺の復興が、泰時の「徳政」として特筆されているといえよう。

周知の通り、北条泰時の名君ぶりを示す逸話は様々な文献に記されている。泰時に対する評価は生前から既に高かった^{〔18〕}。しかし、それらの多くは、泰時が「道理」を重んじたこと^{〔19〕}や、無欲であったことなど、いわばその政治理念に焦点を置いている。泰時の政策に触れたとしても、それは『御成敗式目』制定に関わるものがほとんどである。『高野物語』のように、神泉苑・曼荼羅寺復興と関連付けて泰時の政道に言及する例は見いだしがたい。これは、『高野物語』の歴史認識の大きな特色であるといえよう。

三 北条泰時と醍醐天皇

『高野物語』においてその政治が称揚されているのは、北条泰時だけではない。後三条天皇と醍醐天皇の治世も高

く評価されている。とはいえ、両者の記述には大きな違いがあり、そこからは『高野物語』の歴史認識の特徴や、作者説との関わりも窺える。まずは巻五の後三条を評する箇所から見ていこう。

後三条院ハ智人ノ誉レ目出クヲハシマス。末代ノ賢王ニテモ渡ラセ給ベシト見エラレケレバ、世ノヘダテアル事ヲモ顧ミ給ハズ。殊ニ御祈ヲ勤メテ、カヒトシク御本意ノ如クニ御位ニツカセ給テ、天下ノ政堯舜ノ昔ニ帰りニケリ。然リトイヘドモ勳賞ヲ重ズル事モナカリケリ。身ノ名利ヲ好マザルガユエ也。

後三条は「智人」の誉れ高く、「殊ニ御祈ヲ勤メ」た熱心な信仰者であり、即位後の政治は堯舜のようであったという。とはいえ、その政治について具体的に言及することはない。

次に、醍醐天皇の治世に関する記述を挙げる。

吾朝ニハ六十代ニアタリ玉ナルベシ。殊ニ法度ニアキラカニシテ、政道ヲ極玉フ。外氏ノ伽藍勸修寺ヲアガメ玉フ御志フカクシテ、其アタリサラズ醍醐寺ヲ建玉ヘリ。二寺同ク顕蜜流布ノ勝地也。此後天曆・天禄・寛弘代々ノ聖主ヲハシマシテ、仏法王法盛ニシテ、国

ノ政ヲサマリ、是皆人ノヨハヒ盛ニシテ、心モカシコク身モ主ツヨキ程也。

醍醐天皇の治世について、「政道ヲ極玉フ」と最大限の賛辞が寄せられており、その中でも特に勧修寺の尊崇と醍醐寺の建立が具体的に評価されている。いうまでもなく、いずれも真言小野流にとつて重要な位置を占める寺院であり、「高野物語」は、北条泰時の場合と同様、醍醐天皇についても、その善政と小野流の保護とを結びつけていると思われる。ここからは、「高野物語」作者の立場が明確に窺えるとともに、醍醐と泰時を並列させる意識も看取されよう。

醍醐と泰時を並べる記述といえば、室町幕府の基本法典である『建武式目』⁽²¹⁾末尾に、

遠訪^ニ延喜天曆^ニ而聖之徳化^一、近以^ニ義時泰時父子之行^一 状^一、為^ニ近代之師^一。

とあるのがまずは想起されよう。さらにこうした理解を示す文献を遡っていくと、『御成敗式目』の注釈書である『関東御式目』にも次のような記述が見られる。⁽²²⁾

君臣文武共陰陽象、天ノ四季寒暑ナス様上下和合賞^ヲ 罰明、正直先^ヲ、堯舜耳^ノ延喜天曆上世反、源右幕

下、武州禪門徳政^ト 違哉。

傍線部のように、堯舜と延喜天曆の治、そして頼朝・泰時の徳政とが挙げられている。『関東御式目』の跋文には「永仁四年（筆者注、一二九六）二月十一日書終之。本抄在之」とあるので、醍醐の治世と泰時の治世とを並列させるといふ発想は、遅くとも十三世紀の終わりまでには醸成されていたことが知られる。

『関東御式目』の著者は未詳ではあるが、跋文には注釈者の「僕」によつて執筆の経緯が記されている。

在俗之昔、文永之比、為^ニ文選読合^一、常参^ニ左京大夫俊国儒亭^一（六角大宮）。或時被^レ命云、武家ニハ式条トカイイフ文アリ、披見之処云^レ是非、文章珍重也。（中略）僕对申テ云、式条アラズ、式目候。京兆又被^レ命云、イサヤトヨ何ニテモアレ殊勝也云々。僕又申云、武州禪門崇徳院後身ト申説候。権化人也。仍神妙候哉。

これによれば、著者は藤原俊国亭に出入りでき、永仁四年当時は出家していた人物であろう。傍線部からは、著者が『御成敗式目』や北条泰時に対して、深い知識を有していたことが推察される。

残念ながら、『高野物語』と『関東御式目』との直接的な関係は確認しがたい。しかし、少なくとも『高野物語』が、こうした『御成敗式目』注釈の世界に見られる言説と同様の記述を有しているとはいえるであろう。

ここで想起しておきたいのは、『高野物語』の著者が勸修寺道宝と考えられるということである。すなわち、親王院本の表紙裏には成宝作とする記述があるものの、『高野物語』は仁治四年（一二四三）以降の成立が確実であり、安貞元年（一二二七）に没した成宝作との説は成り立たない。一方、三宝院本奥書には勸修寺道宝の作との記述がある。『高野物語』には「小野ノ正統ノ流ハ勸修寺ニ侍ベシ」といった記述が散見し、「この内部徴証による推定は、先に述べた三宝院本のあげる道宝説と少しも矛盾をきたさないばかりかそれを裏付ける証拠とすることができるとい²³う。

その道宝の事跡をたどっていくと、鎌倉との密接なつながりが浮かび上がってくる。まず、道宝は九条家の出身であった。『尊卑分脈』によれば、道宝の父は良輔、祖父は源頼朝と密接な関係を結んだことで知られる兼実であった。周知のように、兼実や道家は鎌倉幕府との関係が深

く、建保七年（一二一九）に三代將軍源実朝が暗殺された後には、道家の子頼経が第四代將軍となっている。道宝はその道家の猶子となっていた²⁴。道宝の異母兄である良瑜は関東で活躍してもいる²⁵。さらに道宝は、良瑜から鎌倉で付法を受けており、自身も鎌倉で授法を行った形跡がある²⁶。

既に見たように、『高野物語』の聞き手は、承久の乱に際して遁世した清和源氏の人物と設定されている。そして『高野物語』では、泰時の善政と小野流の庇護とが結びつけられていた。ここからは、『高野物語』著者が、承久の乱や北条泰時の政治に対して強い関心を寄せ、泰時を自らの法流の庇護者に位置づけていたことが窺えよう。こうした関心のありようよりすれば、『御成敗式目』注釈の世界に見られるのと同様の認識を、『高野物語』作者も有していた可能性は充分考えられよう。そして、こうした認識を有し得て、かつ勸修寺に関わるという作者像を考えてみたとき候補として浮上してくるのは、やはり関東と深いゆかりを有していた道宝ということになろう。

四 三浦氏に関する記述

該書の歴史認識と作者説との関わりをめぐっては、鎌倉

幕府の御家人に言及する次の箇所も注目される。卷三、真言が他宗とは異なり三力を具足していると主張する場面である。

…：頼朝、文学上人ノ計ニ依テ、法皇ノ院宣ヲ申給テ、東八ヶ国ガ家ノ勇士等ヲ催シ、強敵ヲシナヘテヨク平家ヲホロボセリ。是、何故ニカト尋ヌルニ、三ノ□ニアルベシ。一ニハ其身、六孫王ノ末、八幡太郎四代ノ孫ニテ侍ケル上、北条四郎後見ニテ合戦ノアルベキ支度・計ヲ廻ラス事、勝レタル故。二ニハ、法皇院宣ヲ申給リタル故。三ニハ、祖父義家・贈祖父頼義、共ニ奥州ニ太守トシテ東八ヶ国勇士ニテ、是ニ帰セリキニ、当時、権勢ニヨリテ平家ニ属セリトイヘドモ、三浦・鎌倉ナド云重代ノ武士、ミナ相伝譜代ノ家人、三力ニ喩ニ、(中略)合戦ノ計ノ勝レタルハ、以我功德力ニアタレリ。(中略)院宣ハ如来加持力也。(中略)東国ノ勇士、皆家人ナルハ、法界力ニアタレリ。

ここでは、頼朝が平家を打倒することができた原因が三つ挙げられている。一つ目は頼朝が清和源氏の流れを汲む上、北条時政の後見があつたため。二つ目は、後白河法皇

の院宣を得たため。そして三つ目は、傍線部のように、三浦・鎌倉など相伝の家人もいたためだという。これらが、それぞれ真言の具足する三力に対応しているわけである。

さらにこの後、右の引用箇所を踏まえた記述が続く。

サキノタ〔ト〕ヒノ如ク、今カタキトナル千騎万騎ノ兵、ミナ、ワガ相伝ノ所従也ト知ヌル事ハ、誠ニイミジカルベケレドモ、相伝ノ中ニモ二ノシナルベシ。今モ強敵ニナビカサレテ威ニ恐ト云トモ、内心ニ深く重恩ヲハスレザル人アリ。如_レ是輩ハ、コトバラカハスニ心ヲエタル者也。則、三浦・佐々木等ガ始ヨリ源氏ニ随ヘリシガ如シ。又、昔ハ重代ノ家人ナレドモ、今ハ敵方ニツヨク心ヲ寄タルモアリ。大庭三郎・伊東入道等ガ如キノ者也。善悪同妄心ナリト云ヘドモ、戒定恵ノ善恩ハ、久シク真心ニ順ジテ妄ヲソムカン事ヲ思ヘリ。三浦ガ如キ重恩ヲ思ガ如シ。

相伝の所従にも二種類あるという。内心に深く重恩を忘れず、当初より源氏に従っていた三浦や佐々木といった者。それから、大庭三郎や伊東入道らのように、かつては重代の家人であつたが、現在では敵に強く心を寄せている者。そして、善悪はともに妄心ではあるが、戒定恵の善恩は真

心に従い妄を背く。このことが、三浦のような重恩を思う者に喻えられている。『高野物語』が東国の事情に詳しいことは既に先行研究にも言及があり、先に挙げた泰時の逸話などから、該書には「鎌倉幕府寄りの姿勢」が読み取れるとされる⁽²⁷⁾。さらに右の三つの傍線部からは、三浦氏を特筆する意図が看取されるのではなからうか。

そして、こうした『高野物語』の記述もまた、道宝を作者とする説と整合するのである。前述したとおり、道宝は九条家の出身であった。九条家は、三浦氏との密接な関係が指摘されている。すなわち、將軍源実朝死後、源氏將軍の血筋が絶えてしまったとき、三浦義村は九条道家の子頼経を迎えるよう進言したとされている。頼経將軍就任後、義村は子の泰村とともに頼経の側近として権勢を誇ることになる。また承久の乱では、義村は北条泰時とともに幕府軍を率いて入京、戦後処理の過程において、京都の公家社会でも大きな影響力を持つていたことが知られており、「鎌倉幕府の中でも朝廷から最も重んじられた義村ら三浦一族は、朝廷において実権を握っていた藤原公経・藤原道家と深いかわりを有していた」というのである⁽²⁸⁾。

こうした三浦氏と九条家との関わりよりすれば、右に引

用した記事は、『高野物語』作者を道宝とする作者説と全く矛盾しない。それどころか、九条家出身の道宝を作者と考えることで、はじめてこの箇所が三浦氏を特筆することの意味は理解されるのではないか。

おわりに

これまで『高野物語』については、主に教理の面や『平家物語』の諸本生成との関わりから論じられることが多かった。一方本稿で述べたように、該書の歴史認識の様相は、従来とは異なる角度から道宝作者説を補強するものと考えられる。

また、北条泰時の登場する神泉苑説話は、鎌倉期の『高野大師行状図画』にも引用されており、さらに『高野大師行状図画』当該箇所は、『太平記』の増補にも利用されている。『高野物語』における神泉苑の記述およびそこで示される独特の歴史認識が、後代の『太平記』の増補にまで引き継がれている点は充分注意しておきたい。

加えて、本稿では詳述できなかったが、『高野物語』には律に関する記述が多い。従来あまり注目されてこなかったものの、親王院本奥書に名に見える阿覚上人融済は、高

野山一心院に住して⁽²⁹⁾おり、融濟の付法を受けた頼円は、伊勢の律僧との交流が確認出来る⁽³⁰⁾。また、一心院自体も律僧と関わりの深い場であった可能性もある⁽³¹⁾。『高野物語』における律的要素は、本稿で扱った該書の作者や成立圏、書写環境と関わるころがあるのであらうか。こうした点も含め、『高野物語』の内実や書写環境については、さらなる考究の余地があると思われる。

注

- (1) 『高野物語』の引用は、巻一～巻三までは醍醐寺三宝院本、巻四・五は親王院本に拠る。巻一・巻二の本文は、馬淵和夫「『高野物語』翻刻(一～五)」(『言語と文芸』第八巻第六号)第十巻二号、一九六七年一月～一九六八年三月)巻三の本文は、阿部泰郎「『高野物語』の再発見―醍醐寺本巻三の復元―」(『中世文学』第三十三号、一九八八年六月)、巻四・巻五の本文は『弘法大師伝全集』の翻刻を使用した。
- (2) 麻原美子「『平家物語』と『高野物語』―唱導性を問題として―」(『日本女子大学紀要』第十六号、一九六七年三月)。
- (3) 注(2) 麻原氏論文、山崎一昭「唱導と『平家物語』―『高野物語』巻三を中心として―」(『国学院大学大学院文

学研究科論集』第二十六号、一九九九年三月)、浜畑圭吾「『旧南都異本』と『高野物語』の關係」(『平家物語生成考』思文閣出版、二〇一四年(初出は二〇〇六年))等参照。

- (4) 引用は、『中世の文学』に拠る。
- (5) 注(4)『六代勝事記』「解説」(弓削繁氏執筆)。
- (6) 引用は、『新日本古典文学大系』に拠る。
- (7) 引用は、『日本古典文学大系』に拠る。
- (8) 大森志郎「百王思想」(『日本文学』第二十一巻第七号、一九七二年七月)。
- (9) 引用は、『日本古典文学大系』に拠る。
- (10) 阿部泰郎「中世高野山縁起の研究」(元興寺文化財研究所、一九八二年)。
- (11) 引用は、『弘法大師伝全集』所収六巻本に拠る。
- (12) 引用は、『古典文庫』に拠る。
- (13) 『仁和寺日次記』建保三年(二二一五)七月十二日条(引用は、『大日本史料』に拠る)には、
上皇仰近臣以下、令掃除神泉池底給、及数日。とあり、後鳥羽が神泉苑の池底を掃除させたことが知られる。その他、『明月記』にはたびたび後鳥羽が神泉苑に行幸したとの記事も見える。
- (14) 「隔壁の誕生―中世神泉苑と不可視のシステム」(『公共圏の歴史的創造―江湖の思想へ』東京大学出版会、二〇〇〇年(初出は一九九六年))。

『吾妻鏡』寛喜三年十月十二日条（引用は、『新訂増補国史大系』に拠る）には、

今日、安嘉門院御所并神泉苑修理事、有其沙汰。是為「將軍家御役」。

とある。

(15) 後藤丹治『太平記の研究』（大学堂書店、一九三八年）。

さらに、森田貴之氏は、神泉苑説話が梵舜本の段階で『太平記』に取り込まれたことを明らかにした（『太平記』と弘法大師説話―引用説話の射程―、『太平記』国際研究集会編『『太平記』をとらえる』第二巻、笠間書院、二〇一五年）。

(16) 引用は、『真言宗全書』に拠る。

(17) 『六代勝事記』には、こうある。

同（筆者注、承久三年六月）十五日に、百万のいくさ入洛して、畿内・畿外にみちみたり。

六月十五日に、幕府軍が京都に侵攻したという。同様の記述は、『百鍊抄』、『吾妻鏡』にも見られる。

(18) 藤原経光の『経光卿記抄』（引用は、『大日本史料』に拠る）には、泰時の訃報に際して以下のように書きとどめてゐる。

性稟廉直、以「道理」為_レ先。可_レ謂唐堯虞舜之再誕歟。

泰時が「道理」を重んじ、その政治が古代中国の聖帝に擬えられている。

(19) 例えば、『沙石集』卷三「訴訟人の恩を蒙る事」（引用は、『新編日本古典文学全集』に拠る）には、泰時を「実に情けありて、万人をほぐくみ、道理をも感じ申されける」と評する記述が見える。

例えば、『明恵上人伝記』（引用は、平泉混『明恵上人伝記』講談社学術文庫、一九八〇年に拠る）には、泰時の時代に世が治まった理由を、「万小欲に振舞し故にやらん」とする記述がある。

(20) 引用は、『中世法制史料集』に拠る。

引用は、『中世法制史料集』に拠る。

(21) 引用は、『中世法制史料集』に拠る。

(22) 注（2）麻原氏論文参照。

(23) 上島亨「随心院と随流の確立」（荒木浩編『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探究』大阪大学大学院文学研究科、二〇〇五年）。

(24) たとえば、『吾妻鏡』嘉禎三年（一二三七）六月二十二日条には、

明日依_レ可_レ有_レ新丈六堂供養。為_レ除_二魔障_一、被_レ修_二五壇法_一。

と、五壇法が修されたとの記事があり、そのうち中壇に「安祥寺僧正良瑜」とある。

(25) 『血脈類集記』第十二（引用は、『真言宗全書』に拠る）には、道宝付法として定祐なる僧の名があり、

文永二年十月二日於_二鎌倉御堂御所_一授_レ之。

と記されている。

(27) 注(3) 山崎氏論文参照。

(28) 高橋秀樹『三浦一族の中世』(吉川弘文館、二〇一五年)。

(29) 親王院本巻五の奥書には、

康応二年(庚午)正月十七日於東山觀勝寺奥坊染成
功畢。偏是為弘法利生也。

右此書写之本者、高野山一心院奥坊阿覚上人以御自
筆之本「写」之云々。可レ秘可レ秘。

金剛資頼円(三九)

于時応永六年十二月十二日同寺西坊書写畢

金剛資重景五八三

とあり、本書は「高野山一心院奥坊阿覚上人」の自筆↓頼
円書写↓重景書写という伝来であることが分かる。「阿覚
上人」とは、次に挙げる親王院本『西院流血脈』に見られ
る融済のことと考えられる(引用は、甲田宥叶「親王院本
『西院流血脈』」(『高野山大学密教文化研究所紀要』第十六
号、二〇〇三年二月)に拠る)。

融済○(嘉暦二年卅五歳受)之。二位律師仁和寺/大
覚寺住也。遁世号「阿覚上人」。高野一心院/奥坊住。
永和五年二月三日入(八十七)

これによれば、もとは仁和寺・大覚寺にいたが、遁世して
阿覚上人と名乗り、高野山一心院に住していたという。

(30) 親王院本『西院流血脈』には、阿覚上人の付法について

次のように記されている。

○融済(付法四十八人)

「頼円(宣真房 高野南院/文中三年六月十四
日印可授之)

阿覚は宣真房頼円に付法している。その頼円は、両部神道
書『神性東通記』(引用は、高野山大学図書館所蔵マイク
ロフィルムに拠る)の奥書にもその名が見える。

此神書者伊勢国弘正寺(律院)淨喜坊慶盛比丘与頼円
依有互為受法之儀。以別儀所相承也。努々於

小野醜翻不可有之也。併天照太神高祖之神慮冥助
之所致也。可レ秘。尤可レ為院家之重宝。後弟得レ心
深可レ信仰者也。

元中四年(丁酉)八月一日 金剛仏子頼円

応永八年(辛巳)十一月七日

於南院今書写、於無量寿院今伝授畢。

金剛仏子良成

これによれば、律院であった伊勢弘正寺僧慶盛と交流があ
ったことが知られる。この頼円は同月に『妙覚心地祭文』
を書写しており、その奥書には「高野山南院専心房」とあ
る。この「専心房」は、親王院本『西院流血脈』の「宣真
房」のことであろう。

(31) 室町中後期頃書写とされる『醜翻祖師聞書』(引用は、
宇都宮啓吾「智積院蔵『醜翻祖師聞書』について―意教上
人頼賢とその周辺を巡って―」(『智山学報』第六十四輯、

二〇一五年三月に拠る）には、意教上人頼賢が「律僧ニ成テ高野山一心院ニ居」たとある。この記述は、一心院が律僧と関わりの深い場とされていたことを窺わせる。一心院と律については、さらなる調査の必要があろう。

※本稿はJSPS科研費（若手研究（B）課題番号17K13388）による研究成果の一部である。

（本学日本語日本文学科専任講師）